

編集：山田浩司 & 美澄

Address: 2208 North Quantico Street, Arlington, VA, 22205, USA

Phone: 1-703-241-0621 E-Mail: mickeyy@pc4.so-net.ne.jp URL: <http://www.sanchai.net>

美澄ママの卒業式



約6ヶ月通ったマッサージセラピーコースもようやく終わりました。思えば、友達からマッサージの学校があると聞いて興味を持ち、申込みをしてみたものの通い始める前はついていけるかとても不安で、何度も辞めようかと思いました。通い始めてからも慣れない英語での授業についていくのが大変で、この私の体重が1~2kg減りました。それでも浩司さんに叱咤激励され、またクラスメートのレズリーに解らないところを教えてもらったりしながら何とか無事にコースを終えることが出来ました。過ぎてみるとあっという間で、色々勉強できて面白かったです。

私が勉強したマッサージはスウェーデン式と言われるもので、こちらのスパ(エステのようなもの?)で行なわれているマッサージで、こちらでは基本のマッサージ方法です。血行を良くし筋肉の凝りをほぐしリラックスさせるのが目的です。

国家試験に通ることを目標としている学校だったので、毎週テストがあり、そのために週末の1日は勉強に充てるため浩司さんには子供達をよく連れ出してもらっていました。そのお陰で、テストの平均は90点でした。もっとも四者択一で選ぶだけだったのでマークシートで育った世代の私には100%完璧に覚えなくてもなんとなく正解を当てる事ができました。授業内容は、解剖学、マッサージの実技、

体の仕組みなどで、面白かったのですが、覚えることが沢山あって大変でした。

学校に行って変わったことは、カフェインを摂ると手が震えるようになりコーヒーやお茶などを殆ど飲まなくなったこと、時々悩まされていた頭痛が無くなったこと、カフェインの入っていない水分を沢山（1日最低2~3リットル）飲むようになったこと、そして、爪の白いところが無いように短く切りそろえるようになったことなどです。また、英語の医療用語の語彙が増えたので子供が病気や怪我をした時に役に立ちました。アメリカ人の友達もできました（上の写真はクラス写真です）。

とにかくこの半年間はとても充実していて生涯でも忘れられない半年になりそうです。こんな機会を与えてくれた浩司さんや家族に感謝しています。

日本に帰りましたら、皆さんをマッサージいたしますので是非声をかけて下さいね。（美澄）

リーフパッドは使えそう？



去年のクリスマス商戦、アメリカで大ヒットしたおもちゃがある。リーフパッド社の「リーフパッド」という。形はノート型パソコンと似ており、これを開いてテキスト各ページのイラストにペンを当てるとその単語の発音がスピーカーから流れてくる仕組みだ。簡単な文章も、文頭にペンを当てれば全文朗読が流れ、各単語にペンを当てればその単語だけの発音が流れてくる。また、楽器の音色や動物の鳴き声も流れる。別売りのテキストとICカートリッジをセットすれば、算数や理科の勉強だってできる。美澄ママは人体のイラストを見て、マッサージ関連の語彙を増やすのにも役立つと言っている。

去年のクリスマスといったら我が家族は日本に帰っていたので、何が売れ筋かなんて全然関心なかった。ところが、半年以上経った今になって、仕事を通じてこのシステムの存在を知った。アフガニスタンの地方農村部で、このシステムを女子の識字教育に活用できないかというアイデアが、アメリカのあるNGOから世銀に提示されたのがきっかけだ。

これは是非自分の子供で試してみなければ――。そう考えた私は、リーフパッド本体と語彙、数のテキストをトイザラスですぐに購入した。本体40ドル強、テキスト2冊と併せて100ドルの出費だ。効果はてきめんで、特に千智がよく使っている。使い方のルールは理解できていないが、どのイラストにペンを当てても声や音が聞こえてくるところに興味を持ったようだ。もっとも、システム自体が右利き用なので、左利きの千智はペンが使いにくそうだ。樹生は今は蒸気機関車の絵を描くのに夢中である。テーブルに向かって何かを集中してやっているのは悪いことではないけれども、元々樹生に先ず使ってもらいたいと思ったオヤジは若干肩透かしを食らった気分である。

このシステムがアフガニスタンで使えるかだが、確かに子供達の興味は惹くだらう。ただ、この類のシステムは、各家庭内での個人使用を想定していると、NGOが主たるターゲットとしている女の子ではなく、男の子に先に使われてしまうのではないかと危惧される。使用のルールを予め周知しておかないと、私達が期待した使い方は決してしてくれない。180度しか開かない機械を360度開けようとしてみたり、ペンの部分を引きちぎって無くしてしまい、代わりに鉛筆を使おうと試みたり、そもそも音の出る機械なんて見たこともない人達が使うのだから、我々が当たり前に思っていることが通用しない、アフガンの農村はそんな場所だと思う。

僕の夢はレーシング・ドライバー

キャディラック・ナショナル・グランプリ



樹生に大きくなったら何になりたいか尋ねると、「レーシング・ドライバー!」と必ず答える。JICAの藤江さんの奥様から去年の誕生プレゼントでもらったミニカーが大のお気に入り、その後たまたまNASCAR（全米ストックカー選手権）のテレビ中継で自分のミニカーと同じ車が走っているのを見つけ、ずっと憧れていたらしい。歴史は繰り返すというか、浩司パパが3歳の頃に父に東京モーターショーに連れて行ってもらい、多感な少年時代を「サーキットの狼」をきっかけとしたスーパーカー・ブームとともに過ごしたのを思い出す。パパのヒーローは「王・長島」で、将来は「野球選手」と言っていたような気がするが、パパの場合もテレビの野球中継がきっかけだったように思う。だからと言って、親に野球場に連れて行ってもらったことはなかったけれど…



↑明日の名ドライバー。今はアクセル&ブレーキに足が届かず、カーブを曲がり切れず…

本気でレーシング・ドライバーになるかならないかはともかく、興味を持つのは良いことだと思う。だから、7月19日から21日にかけてワシントンのRFKスタジアム特設コースで「キャディラック・ナショナル・グランプリ」が開催されると聞き、ホンモノのカーレースを見せる良いチャンスだと考え、パパと樹生の2人きりで決勝レースの観戦に出かけた。

アメリカはカーレースが非常に盛んである。NASCAR以外にも、CARTやインディ選手権といったフォーミュラカーレースがあるし、「ホット・ホイール」という1/4マイルの加速力を競うドラッグレースや、改造トラックによるストックカーレースがそこら中で行なわれている。昨年レース中の事故で亡くなったNASCARのスーパースター、デール・アーンハートは、全米のプロスポーツ選手の中で4番目の高額所得者である。

私達が観戦したのは、「アメリカン・ルマン・シリーズ」という耐久レースで、高出力のエンジンに空力を考慮してデザインされた独自のシャーシを被せ



↑…で、結局とどのつまりはレーシングカー・ゲームがお似合いということで。(これもパパが歩んだ道!?)

たレーシングカーに、ポルシェやフェラーリ、シボレー、ドッジのように、市販車を改造した GTカーが混じって長距離の耐久性を競うレースだった。スタート時刻ギリギリでグランドスタンドに辿り着き、20分ほどスタンドで観戦した。

スタンドからコースまでは 10m 程度しか離れておらず、グランドスタンド前の直線コースを加速するレースカーの爆音は、耳の鼓膜が破れるほど凄まじい。地声の大きい樹生ですら、私の耳元で大声で話してくれないと何言っているのかさっぱりわからない。樹生などは両耳を手でふさいでいる状態だった。耳栓かヘッドホンを持ってこなかったことを心底後悔したが、隣で観戦していたお姉さんが、持って来ていた毛糸を丸めて耳栓を作ってくれたので助かった。

ワシントンでの開催は三十数年振りとはいうものの、アメリカのファンはレース慣れしている。折り畳み式のキャプテンチェアを担いできて、レースの醍醐味とも言えるコーナーバトルを楽しむため、コーナーほど人が集まる。レースの間ずっとそこに座り続けるのではなく、売店でビールやホットドックを買って来て飲んだり食べたりガヤガヤしながらの観戦だ。通はヘッドホン・ラジオを持って来ていてレースの中継を聴きながら観戦するが、普通の人はずっと目の前を通り過ぎるレースカーのバトルをただ楽しむだけだ。順位がどうなっているのかはグランドスタンドにいなければわからないので、最頂の選手を応援するでもなく、単にスポーツとして楽しんでいる感じがする。

スーパーカー・ブームであれだけはまったパパですら、鈴鹿サーキットでホンモノのレースを観たことはない。5 歳児にホンモノのレースを見せたインパクトは相当強いただろう。レース観戦を終えた後、それでもレーシング・ドライバーになると尋ねたところ、「うん!」と強く頷く樹生であった。それをいいことに、パパもママも、「レーシング・ドライバーになるにはもっと勉強しなければダメなんだよ」「英語と日本語だけじゃダメなんだよ、フランス語もできなくちゃあ…」などと焚きつけ、樹生君をお勉強へと向かわせるズルイ親と化している。

斎藤真勝君の初海外旅行は鉄道づくし



7 月末から 8 月上旬にかけて、我が Quantico Street Guest House にはお客様が 1 人お泊りになった。斎藤真勝君という、美澄が小学校の頃からお世話になっている絵画の先生の息子さんだ。丁度美澄がマッサージセラピーのクラスを修了するタイミングでもあり、姉貴気取りの美澄は斎藤君を案内して今日はホワイトハウス、明日はスミソニアン博物館群といった具合で、連日フルアテンドした。

斎藤君は鉄道マニアということで、「ペンシルバニア鉄道博物館」「ストラスバーグ鉄道」「ボルチモア&オハイオ鉄道博物館」といった、これまでも「サンチャイ通信」紙上でご紹介した主要な鉄道関連施設の他、南北戦争最大の激戦地ゲティスバーグを訪ねた際も、当地にある「リンカーン鉄道博物館」を覗いてみた。ここにもおびただしい数の鉄道模型が展示されており、実際に模型の町の中をオモチャの鉄道が走る

という展示もあり、斎藤君だけではなく、うちの樹生もひどく興奮していたことは言うまでもない。できればストラスバーグにある鉄道模型の専門店にも連れて行きたかったけれども、さすがに週末の田舎町は閉店時間が早くて、間に合わなかったのは残念である。

私は「ペンシルバニア鉄道博物館」と「ボルチモア鉄道博物館」の会員登録をしているので、家族連れの入館は何度やってもタダだ。隣接するギフトショップでは5~10%の割引がきくメリットもある。何度訪ねても毎回違った発見があって、鉄道博物館巡りは面白い。「これだけの展示は日本ではなかなかないので圧倒されますね。」斎藤君は持ってきた写真フィルムの大半を機関車の撮影に使っていたようだ。ストラスバーグの機関車ツアーも、過去3回は冬場であったりどんよりした曇天だったりして田園地帯の景色も殺伐としていたが、今回は真夏のツアーで、「アーミッシュ・カントリー」と呼ばれるこの一帯は、この季節には成長したとうもろこしで覆われる。青空にとうもろこしの緑が映えて、過去3回とは全く違った景色であった。景色がどうであろうと、行けば毎回嬉しくて仕方がないのは樹生である。今回は鉄道づくしの旅だったので、それはそれはご満悦だった。

千智も真勝おにいちゃんに遊んでもらって、おにいちゃんが大変お気に入りだった。斎藤君を家来にして我がまま放題のお姫様という感じだった。おにいちゃんが日本に帰った後、樹生よりも千智の方が寂しがっているように見えたのは私の錯覚だろうか。

斎藤君滞在中の出来事

- 斎藤君来訪にかこつけて、美澄ママも斎藤君を伴ってケネディセンターで開催されたミュージカルの鑑賞に出かけ、それなりにオイシイ思いをした（旦那はそちらの方面に全く無関心！）。私はどうかというと、今回の斎藤君の滞在期間中最も印象に残ったのは、8月4日（日）、ゲティスバーグ古戦場を車でまわったことだった。1863年7月に行なわれたこの南北戦争最大の激戦は、日本で言えば関ヶ原の合戦である。関ヶ原の場合もそうだが、私はどうもこの類の合戦になると両軍がその合戦に行き着く過程や、時々刻々と変わってゆく陣形や戦況、戦後処理の駆け引きに惹かれる。今、ゲティスバーグで購入した南北戦争の本を、少しずつ読んでいる。そうして、ゲティスバーグの前哨戦として1862年8月から9月に戦われたブル・ラン（バージニア州マナサス）やアンタイタム（メリーランド州）の位置付けも僅かながら理解し始めたところだ。マナサスやアンタイタムは合戦から140周年を間もなく迎えるため、新聞でも特集記事が多くなってきている。その意味では、今ゲティスバーグを訪ねて南北戦争に興味を持ったのは時宜を得たものだった。
- 8月3日（土）、斎藤君に家族のお相手を任せ、メリーランド州の州都アナポリスで開催された剣道セミナー兼トーナメントに参加した。有段者は午前中審判の仕方を教わり、午後に行なわれた個人戦で実際に試合を裁いて経験を積むことができた。三段を持っていると、どこのトーナメントに行っても必ず審判を頼まれるが、普段の志道学院での稽古では試合の裁き方については全く学ぶ機会がないので、今回のセミナー丁度良い勉強になった。私が剣道をやっていた20年以上前とは考え方や解釈が大きく変わっている部分も多く、昔のやり方が今は通用しないことがよくわかった。午後の個人戦では、私も三段以上の部で出場機会があった。参加者はたった4名で、私は一回戦で審判の講習をして下さったノースカロライナのパーカー先生と当たり、首を傾げる胴1本の判定で負け、三位決定戦でこれまた首を傾げる面1本の判定で勝ち、三位で盾を頂戴した。いずれも有効打とはとても思えないものだったが、審判を務めたのは皆初段か二段の方々だし、不利な判定も有利な判定もあって差引ゼロだから何とも言えない。それはともかく、1994年の埼玉県上尾市市民剣道大会二段以下成人の部で三位に入って以来久々の入賞で、ちょっぴり嬉しかったことは言うまでもない。（浩司）

パパの自己申告書① アイランド・コンサルタントミッション

まず、お断りですが、これまで「私の仕事紹介」としてきたこのコーナーを、世界銀行の OPE に就いて、配属先の世銀信託基金戦略・ドナー協調ユニット (TFS) で何をやってきたのか、どのような成果を挙げたのか、そして自分がいかに重要な人間かを自己アピールする場としたいと思います。

世銀の組織は非常に流動的で、私の所属先も今年 2 月に組織改編を経て TFS と名を変えたが、会計年度が改まる 7 月は、途上国民間企業への与信を主に行なう国際金融公社 (IFC) を中心に、かなり大幅な組織改編があった。その 1 つとして、民活インフラ局 (PSI) のビジネスパートナーシップグループ (BPG) が解体され、中小企業部に統合されるという出来事があった。BPG はウォルフェンソン総裁が先進国民間部門とのパートナーシップを強化して、途上国の民間企業育成を共同で行なうことを目指して設置された部署で、5 年間のうちに先進国の民間企業団体と十数件のパートナーシップ覚書締結に繋げた。余談ながら世銀が民間団体と正式なパートナーシップ覚書第 1 号を結んだ相手は日本の経団連である。その結果何が起きたかということ、民間団体が途上国関連の仕事の受注機会拡大を狙ってワシントン詣でをする際の世銀側窓口がはっきりしなくなった。

そんな時、アイルランド政府機関の 1 つで同国の民間企業の海外でのビジネス機会拡大を促進する目的で設立された「エンタープライズ・アイルランド」が、ワシントンのアイルランド大使館や世銀アイルランド理事室を経由して、同国の中小のコンサルティング会社 6 社から成るマーケティングミッションを派遣したいと要請してきた。アイルランド理事室から TFS のイアン課長が受けたものだ。ミッションの目的は、これまで世銀とビジネスの経験のないコンサルティング会社に世銀のプログラム、調達手続への理解を深めてもらう一方で、彼らの専門分野を世銀のタスクマネージャーにアピールし、今後タスクマネージャーがアイルランド人のコンサルタントを活用する際に、彼らを候補の 1 つとして含めてもらえるようにすることである。世銀にはこのように先進各国が預託し、その国のコンサルタントに世銀とのビジネス経験を積んでもらうことを第一の目的とする「信託基金」がいくつもある。この信託基金は 100% ひも付きで、アイルランドが開設した信託基金は、アイルランド人コンサルタントの備上にしか活用することができない。しかし、世銀の各地域局には同国籍のコンサルタントの十分なデータベースを持っているところが少なく、世銀の調達ルールに則って 3 社以上の候補者の中から選定するというプロセスがなかなか踏めないという世銀側の直面する問題がある。

こうしたミッションの受け入れとは何をするのかということ、初日は総論編ということで、世銀の開発援助プログラムや、信託基金の仕組み、コンサルタント選定プロセス、コンサルタントによる世銀プロジェクトへのアプローチの仕方といった基礎知識を、世銀の職員に講師になってもらってプレゼンテーションしてもらう。そして 2 日目以降は各論編で、各コンサルタントの専門分野に合わせ、さらにアイルランド信託基金の地域別配分状況も踏まえて、アイルランド人コンサルタントを使ってくれそうな世銀タスクマネージャーと各コンサルタントの個別面談をアレンジする。1 社平均 8 件の面談を行なうので、合計すると 50 件近い面談を個別にアレンジすることになる。ただでさえ世銀職員には人によっては極めてレスポンスが悪い人がいるのに、7 月といえば夏期の長期休暇を取る職員が多く、これはと思ったタスクマネージャーがなかなかつかまらない。なかなか骨の折れる準備作業だ。

それにしても、世界で最も聞き取りにくいアイルランド英語との初めての遭遇は、言葉の面でも大変な思いをした。耳が慣れてくるまでは、何を言っているのかさっぱりわからなかったのだ。

準備も実際の受け入れも大変だったけれども、アイルランド側の反響はかなり大きかった。来訪したコンサルタント各社から「非常に満足のいく世銀訪問だった。」との感謝のお言葉をいただき、アイルランド大使館のレセプションに呼ばれて出席した際も、大使館の一等書記官がスピーチの中でわざわざ私の名前まで出して世銀の対応振りを評価して下さった。それが世銀のシニアマネジメントにも伝わり、なんとゴールドシュタイン専務理事からもお褒めの言葉を頂戴した。涙が出るほど感激した。

編集後記

- 久しぶりにサンチャイ通信を書きました。1つの記事を書くだけだったのに相変わらずの遅筆。浩司さんに催促されながらようやく書きました。学校が終わった後ちゃんと国家試験に向けて勉強するつもりだったのに、案の定何もしないうちに毎日が過ぎていきます。こうなったら開き直りで8月はしっかり遊んで9月からちゃんと試験勉強するぞ！（美澄）
- 9月から樹生は公立のキンダーガーデン（幼稚園）、千智は樹生が今まで通っていたウェストゲート託児センターにそれぞれ通い始めます。私は9月からの予定は全く決まっていないのですが、できればどこかでマッサージの仕事をしていきたいと思っています。それに向けて8月によくWork Permit（就労許可証）の申請をしました。通常2~3ヶ月かかるとのことでしたので、それまでは知人をマッサージして練習しようと思っています。このサンチャイ通信を読んでいる方で、興味がある方はワシントンDC観光とマッサージツアーを企画いたしますので遊びにいらっしやいませんか？歓迎しますよ。（美澄）
- 他の出来事ばかり取り上げたので本文中では紹介できませんでしたが、この1ヶ月の間に、ウルフトラップ公園のフィレン野外音楽堂に3回行く機会がありました。日本の和太鼓の「鼓童」（但し、仕事が入った私の代わりに、JICAの片山所員の奥様が急遽参加）、クリストファー・クロスやアラン・パーソンズといった1980年代初頭的美澄や私が高校か大学の頃に活躍したアーティストによるヒットナンバー&ビートルズの曲の演奏、そして、黒人コンテンポラリー音楽のナタリー・コールとジョージ・ベンソンによる演奏と、美澄と私がそれぞれの青春時代に聴いた懐かしい曲に多く触れることができ、とても幸せな時を過ごしました。芝生席にレジャーマットを広げ、クーラーボックスにビールやワイン、スナックにサンドイッチの材料等をぶち込み、ほろ酔い気分の日暮れ時、音楽が心地よく響きます。去年は、ウルフトラップで私のお気に入りの「シカゴ」のバンド演奏を聴きました。また、我が家の近所にあるライブハウスに、これまた私のお気に入りの「ジェファーソン・スターシップ」が来ました。1960年代に活躍したバンドが、メンバーを入れ替えながら40年近く経った今でもライブで頑張っているのはスゴイことです。マーティ・バリンがあの特徴の泣きのボーカルで「ハート」を歌ったのを至近距離で見た私は、思わず涙ぐんでしまいました。（浩司）